

「第8回 都立高校向け生成AI研修会(上級者研修)」開催



2025年12月17日、都立高校教職員を対象に、生成AI活用を学ぶ第8回研修会を実施しました。3名の教員・管理職による実践的な対談を通して、生成AIを用いて生徒の思考や対話を深める授業づくりや、学校全体でAI活用を広げていくための考え方について理解を深めることを目的としました。

■ ゲストトーク

東京都立小岩高等学校 椋本 先生

テーマ：“説明すること”で理解を深める授業 AIを門番にして全員を出題者にする

◆生徒全員の口頭試問をチェックする時間なんて、とても取れない

⇒ 生徒が自ら作成した口頭試問の問題を、生成AIが判定。

・AIメニューのステップ

- ①問題がふさわしいか？：生徒が自分で考えて問題をつくっていること。
解答が説明を要する問題になっているかや、教科書の範囲を超えていないか。
- ②合格基準は？：4つの観点をもとに生成AIとやり取りして合格基準をつくる。
- ③出題者として評価：生成AIに問題を出題して、AIが不完全な解答をする。
その解答へ生徒が適切な指摘や模範解答ができるかどうかをAIが判断する。

◆そもそも自分はどんな授業をつくりたいのか

⇒ 授業で生徒が主体的に情報出力する機会を増やす場面で生成AIを活用。

◆小さく始める、試してみる

⇒ 授業の振り返りを生成AIに手伝ってもらう。



AIとのやり取り後に人対人の口頭試問



動画やゲームでfpsの値を使い分ける理由は、映像の滑らかさと機器の性能のバランスをとるためです。fpsが高いと映像がきれいになりますが、処理が重くなってゲームが遅くなることがあります。例えば、映画は24fpsで作られていて、ゲームはもっとfpsが高いです。だから、ゲームは動きが速くて映画はゆっくり見えます。

解答として不適切な点を指摘してください。



fpsが高い理由に、応答速度についての話が入っていないので不合格です

指摘された内容を踏まえ、冷静にわかりやすく説明する形で解答を修正してください。再度、不適切な点があれば指摘しますので、解答を修正してみてください。



AIとの対話を繰り返し、指摘や模範解答の質が向上

まず、映画が24fpsで十分な理由は、映画は映像の滑らかさよりも画質が求められます。映画を見ていたところで少しのラグは許容できます。映像作品を見ている以上、いかに明瞭に見えるかが求められます。つまり低fpsにしてでも画質を挙げたほうが良いということです。一方、fpsゲームでは、少しのラグで勝敗が決まることがあります。つまり画質よりも滑らかさや応答速度が求められる世界だということです

AIメニューのステップ ③出題者として評価のログ

「第8回 都立高校向け生成AI研修会(上級者研修)」開催

■ ゲストトーク

東京都立光明学園 禿 先生

テーマ：一人でも話し合える教室へ 生成AIとつくる新しいグループワーク

◆実際は、生徒1人・先生1人の授業も多い

⇒ 議論の相手を生成AIにやってもらう。

- ・学級会に近いイメージで、的確な意見でなくても生徒自身の考えをまとめ直すヒントとして活用。

- ・先生の直接的な指摘ではなく、生成AIとの対話を通して気づきを促す。
- ・自宅学習でも、自分以外の意見を出してくれる相手としてAI活用ができる。



◆プロンプトの設計

- ・無理に結論を出さない、最初に生徒がテーマを設定し意見を述べる。
- ・生成AIは他の生徒役として3人分までの意見を出す。
- ・人権に注意しつつ、Temperatureを高く設定し多様な意見が出るよう設計。

◆今後、試していきたいこと

- ・知的障害のある生徒の活用を進め、意見を広げる/文章をまとめる場面で、生成AIに事前相談することで安心して発言できる習慣づくり。

◆これから生成AIを使った授業をされていきたい先生へのメッセージ

- ⇒ 生成AIの使用自体を目的にせず、授業の困りごと起点に活用を考える。
- ・生成AIと先生の役割を意識し、生徒の学びを支えるツールとして活用する。

東京都立向丘高等学校 三藤 校長先生

テーマ：まずは触ってみれば? から始まる学校づくり

◆なぜスムーズにAI活用が進んだかや、先生に求めること

⇒ 使わない理由を探すより、とりあえず触れば早いですよ。

- ・研究校として普段から生成AIを使い、調べる/考える場面でAIを活用。
- ・わくわくする授業のためのツールとして生成AIを位置づけ。
- ・授業観察で校長先生自らAI活用について、一言アドバイスを行う。
- ・生成AIを使った授業作りの経験を通して、AI活用を身につける。

◆授業の活用事例

- ・生成AIに質問しながら、文学の理解を短時間で深める。
- ・調べ学習やディスカッションで生成AIの使用を認め、生徒自身もAIの得意/不得意を理解しながら活用。



◆管理職と現場の先生の関係性づくり

- ・生徒だけでなく、先生にも自然に挨拶やポジティブな会話をする。

◆今後の考え

- ・活用方法を枠にはめず、先生と生徒が、学校生活全体の中で生成AIを取り入れていく。
- ・一方で、著作権/個人情報/ハルシネーションといったリテラシーは、生徒とともに考えながら使っていく必要がある。